帝国の殉教者たち
――ナポレオン戦争時代のイギリスにおける軍人のコメモレイション――

中　村　武　司

はじめに

近年、ナポレオン戦争の記憶がヨーロッパで想起されつつある。2005年のトラファルガル200周年を皮切りとして、祖国戦争200周年（ロシア、2012年）や諸国民戦争（ライプツィヒの戦い）200周年（ドイツ、2013年）、さらにはワーテルロー200周年（2015年）を迎えることになる。国家や地方自治体の公式行事や博物館の展覧会[1]、著名な戦いの再演など、さまざまな記念行事がヨーロッパ各地でおこなわれることだろう。1812年戦争（米英戦争）200周年（2012年）もまた、こうしたナポレオン戦争のコメモレイション（記念＝顕彰行為）との関連から考えることができる。ここにあげたのは、おもにナポレオン戦争の戦勝国側の例だが、フランスにとっても、ナポレオンとその帝国は、国民の統合と分裂の可能性を内包しながらも、その集合的記憶においてなお重要な位置を占めている[2]。むろん、規模やインパクト、現在における重要性にかんして、ナポレオン戦争は第１次・第２次世界大戦とくらべるべくもない。しかし、それに先立つ時代、長い19世紀においては、この戦争こそが「大戦」とみなされていたのである。

このような現在のヨーロッパの状況からも確認されるように、戦争の記憶は、国民を単位にして創出され、継承され、再生産されてきた。それは、「最初の近代戦」、「最初の総力戦」と目されるナポレオン戦争を契機にして、ヨーロッパ諸国で国民の編成や再編成がうながされたことを意味する[3]。ナポレオン戦争が政治や社会、文化に与えた影響は、依然として、長い19世紀のヨーロッパ史を考えるうえで重要な問題であり続けている。さらに見逃せないのは、ナポレオン戦争とは、ヨーロッパの社会で共通してみられた経験であったということだ。歴史家エティエンヌ・フランソ

（英語文献の出版地は、とくに記さない場合はすべてロンドンである。）

1 その例として、さしあたり以下の展覧会のカタログを参照されたい。Margarette Lincoln (ed.), *Nelson and Napoleon* (2005); *Napoleon und Europa: traum und trauma* (München, 2010).

2 E.g., Michael Paul Driskel, *As befits a legend: building a tomb for Napoleon, 1840–1861* (Kent: OH, 1993); Sudhir Hazareesingh, *The legend of Napoleon* (2004); idem, The *Saint-Napoleon: celebrations of sovereignty in nineteenth-century France* (Cambridge: MA, 2004). 杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ――記憶史への挑戦』（山川出版社、2002年）.

3 David Avrom Bell, *The first total war: Napoleon's Europe and the birth of modern warfare* (2007).

ワの言葉を借りれば、フランス革命・ナポレオン戦争は、ヨーロッパに共有の、しかし複雑にからみあった「記憶の場(lieu de mémoire)」というわけである[4]。

歴史的記憶やコメモレイションの問題を考えるにあたり、有力なアプローチのひとつとしてあげられるのは、記憶を形成し、意味づけ、人びとに伝えるメディアを分析することである。自伝や回想録、刊行された日記、絵画、銅版画など、さまざまな記憶のメディアが存在し、それらは相互に関係しあい歴史的記憶の形成に寄与しているものの、本稿ではモニュメントに注目したい。具体的には、イギリスの首都ロンドンのセント・ポール大聖堂に建立された一連の軍人のモニュメントを対象に考察を進める。それにより、イギリスの歴史的過去におけるフランス革命・ナポレオン戦争がもつ意義について理解を深めることをめざしている。

考察にあたり、以下の点に注意することにしたい。セント・ポール大聖堂の軍人のモニュメントにかんしては、イギリスのナショナル・アイデンティティやパトリオティズム(愛国主義・愛国心)、マスキュリニティなどの諸問題との関係から研究がおこなわれてきた。古くはアリスン・ヤリントン、近年ではホルガー・フックやイヴリーン・ボウワーズの研究がその例だが、彼らは、海軍士官と陸軍士官のモニュメントをとくに区別することなく議論している[5]。しかしながら、長い18世紀のイギリスの政治文化における海軍と陸軍の対称的な位置づけや[6]、イギリスの国民形成においてナポレオン戦争がもつ重要性を考慮した場合[7]、両者を分けて検討する必要も出てこよう。

もっとも、筆者はすでにネルソンの国葬(1806年)をはじめとする海軍士官のコメモレイションやモニュメントについて論じたことがある[8]。そこで本稿では、陸軍士官、なかでもイギリス帝国や非

---

4 Alan Forest, Étienne François and Karen Hagemann (eds), *War memories: the Revolutionary and Napoleonic Wars in modern European culture* (Basingstoke, 2012), pp.386–402.

5 Alison Yarrington, *The commemoration of the hero 1800–1864: monuments to the British victors of the Napoleonic War* (1988), esp. chapters 2 and 3; Holger Hoock, 'The British military pantheon in St Paul's Cathedral: the state, cultural patriotism, and the politics of national monuments, c.1790–1820', in Richard Wrigley and Matthew Craske (eds), *Pantheons: transformations of a monumental idea* (Aldershot, 2004), pp.81–105; idem, *Empires of the imagination: politics, war, and the arts in the British world, 1750–1850* (2010), chapters 3 and 4; Eveline G. Bouwers, *Public pantheons in revolutionary Europe: comparing cultures of remembrance, c.1790–1840* (Basingstoke, 2012).

6 18世紀イギリスにおいては、陸軍が自由を脅かす専制政治の道具とみなされていたのにたいして、海軍は、自由や国制、パトリオティズム、貿易、帝国と密接に結びつけられ、肯定的に評価されていた。たとえば、以下を参照。Kathleen Wilson, 'Empire, trade and popular politics in mid-Hanoverian Britain: the case of admiral Vernon', *Past and Present*, cxxi (1988), pp.74–109; Gerald Jordan and Nicholas Rogers, 'Admirals as heroes: patriotism and liberty in Hanoverian England', *Journal of British Studies*, xxviii (1989), pp.201–24; N.A.M. Rodger, 'Queen Elizabeth and the myth of sea-power in English history', *Transactions of the Royal Historical Society,* 6th ser., xiv (2004), pp.153–74; Timothy Jenks, *Naval engagements: patriotism, cultural politics, and the Royal Navy, 1793–1815* (Oxford, 2006).

7 リンダ・コリが『ブリトンズ』のなかで、とくにフランス革命・ナポレオン戦争時代について大きな紙幅を割いて議論していることに注目。Linda Colley, *Britons: forging the nation, 1707–1837* (New Haven, 1992)［川北稔監訳『イギリス国民の誕生』(名古屋大学出版会、2000年)］. また、J.E. Cookson, *The British armed nation, 1793–1815* (Oxford, 1997)もみよ。

8 中村武司「ナポレオン戦争の記憶とセント・ポール大聖堂」、『パブリック・ヒストリー』1号(2004年)、57–73頁; 同「ネルソンの国葬――セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレイション」、『史林』91巻1号(2008年)、176–97頁。

ヨーロッパ地域で戦死した士官たちのモニュメントを中心にとりあげ、イギリスのナショナル・アイデンティティにかかわる論点、すなわちイギリスの自由やスコットランドらしさ（Scottishness）、イギリス帝国とその統治の変容という３つの論点との関係から、モニュメント建立の経緯や背景、その意味を検討することにしたい[9]。

ここで、本稿の考察で用いた史料について簡単に説明しておく。フランス革命・ナポレオン戦争時代に議会が建立を認めたモニュメントを考察するうえで、まずあたらなくてはならないのは、庶民院の議事録や日報をはじめとする一連の議会史料である。現在は、オンライン版House of Commons Parliamentary Papersからその大半を閲覧することができる。また、大蔵省内に設置された国民記念碑設立委員会、通称「審査委員会（the Committee of Taste）」の監督のもとモニュメントの制作が進められたことから、国立公文書館（The National Archives, Kew）所蔵の大蔵省文書も重要な一次史料となる。それ以外には、『タイムズ』をはじめとする当時の新聞や雑誌、各種の未刊行・刊行史料を利用した。

１．誰が記念されたのか

1793年から1823年にかけて、庶民院は計37体のナショナル・モニュメントの建立を決議した。それにあてられた予算は、11万9,175ポンドに達する（表１・図１）[10]。1792年以前は４体、1824年以降は８体のモニュメントしか国費による建立を認められていないことを考慮すると、フランス革命・ナポレオン戦争時代の議会によるコメモレイションは、すぐれてユニークなものとみなすことができよう（表２）。モニュメントが置かれた場所にかんしても、先の時代とは明確な断絶がみられた。従来、国家的著名人の記念の場であったウェストミンスタ寺院には４体のモニュメントが建立されたのにたいして、1790年代にようやくモニュメントを受け入れるようになったセント･ポール大聖堂には、軍人のモニュメントばかりが33体も建立されたのである。それは、パリのサント・ジュヌヴィエーヴ教会が、同時期にフランス革命の偉人を記念するパンテオンに改築されたことに比すべき事業であった[11]。

セント･ポール大聖堂において、どのような軍人が記念されたのだろうか。まず確認されるの

---

9 長い18世紀のイギリス帝国＝植民地をめぐるモニュメントを網羅的にあつかった研究として、Joan Coutu, *Persuasion and propaganda: monuments and the eighteenth-century British Empire* (Montreal and Kingston, 2006)があるが、セント・ポール大聖堂の軍人にモニュメントについて詳述していない。

10 'Return of monuments erected in Westminster Abbey and St Paul's, at the public expense, from 1750 to the present time', *House of Commons Parliamentary Papers*, xxxvi (1837–8), p.471; 'Report from the select committee on national monuments and works of art; with minutes of evidence, &c.', *ibid*, vi (1841, Session 1), p.437; 'Return of sums voted by parliament since 1792, for the erection of monuments in honour of public services performed', *ibid*, xxvi (1842), p.505.

11 パリのパンテオンにかんしては、長井伸仁『歴史がつくった偉人たち――近代フランスとパンテオン』（山川出版社、2007年）をみよ。

表1　議会決議によりセント・ポール大聖堂に建立されたモニュメント、1793-1823年

	氏　　名	位　階	決　　議	費用 *1
(1) 1798年12月20日契約				
1	フォークナ、ロバート	海軍大佐	1795年 4 月14日 (1795年 4 月30日)*2	4,200
2	ダンダス、トマス	陸軍少将	1795年 6 月 5 日	3,150
3	バージェス、リチャード・ランデル	海軍大佐	1797年11月 3 日	5,250
(2) 1803年4月26日／29日契約				
4	ウェストコット、ジョージ・ブラッジョン	海軍大佐	1798年11月21日	4,200
5	ハウ、リチャード、ハウ伯	海軍元帥	1799年10月 3 日	6,300
6	ライオウ、エドワード モッセ、ジェイムズ・ロバート	海軍大佐 海軍大佐	1800年 4 月16日	4,200
7	アバークロンビ、サー・レイフ	陸軍中将	1801年 5 月18日	6,300
(3) 1807年10月29日契約				
8	ネルソン、ホレイシオ、ネルソン子爵	海軍中将	1806年 1 月28日	6,300
9	クック、ジョン	海軍大佐	1806年 1 月28日	1,575
10	ダフ、ジョージ	海軍大佐	1806年 1 月28日	1,575
11	コーンウォリス、チャールズ、コーンウォリス侯	陸軍大将	1806年 2 月 3 日	6,300
(4) 1810年12月7日契約				
12	ムーア、サー・ジョン	陸軍中将	1809年 1 月25日	4,200
13	ハーディング、ジョージ・ニコラス	海軍大佐	1809年 5 月18日	1,575
(5) 1811年9月2日契約				
14	コリングウッド、カスバート、コリングウッド男爵	海軍中将	1810年 6 月 8 日	4,200
15	ロドニ、ジョージ・ブリッジズ、ロドニ男爵	海軍大将	1793年 6 月17日	6,300
(6) 1812年8月15日契約				
16	ハウトン、ダニエル	陸軍少将	1811年 6 月 7 日	1,575
17	マッケンジ、ジョン・ランドル ラングワース、ロバート	陸軍少将 陸軍准将	1811年 6 月24日	2,100
18	マッキンノン、ヘンリ クローファード、ロバート	陸軍少将 陸軍少将	1812年 2 月10日 1812年 2 月22日	2,100
(7) 1814年8月3日／8日契約				
19	ル・マルシャン、ジョン・ギャスパード	陸軍少将	1812年12月 3 日	1,575
20	ブロック、サー・アイザック	陸軍少将	1813年 7 月13日	1,575
21	カドガン、ヘンリ	陸軍大佐	1813年 7 月13日	1,575
22	ボーズ、バーナード	陸軍少将	1813年 7 月13日	1,575
23	マイアーズ、サー・ウィリアム	陸軍中佐	1813年 7 月13日	1,575
(8) 1815年12月19日契約				
24	ロス、ロバート	陸軍少将	1814年11月14日	1,575
(9) 1816年8月30日契約				
25	パケナム、サー・エドワード ギッブズ、サー・サミュエル	陸軍少将 陸軍少将	1815年 6 月 5 日 1815年 6 月21日	2,100
26	ピクトン、サー・トマス	陸軍中将	1815年 6 月29日	3,150
27	ポンソンビ、サー・ウィリアム	陸軍少将	1815年 6 月29日	3,150
(10) 1816年12月6日契約				
28	ギレスピ、サー・ロバート・ロロ	陸軍少将	1815年 6 月21日	1,575
29	ヘイ、アンドルー	陸軍少将	1815年 6 月21日	1,575
(11) 1819年8月5日契約				
30	ゴア、アーサー スカーレット、ジョン・バイン	陸軍少将 陸軍少将	1815年 6 月21日	2,100
(12) 1823年12月18日契約				
31	エリオット、ジョージ・オーガスタス、ヒースフィールド男爵	陸軍中将	1793年 6 月17日	2,100
32	ダンカン、アダム、ダンカン男爵	海軍大将	1823年 3 月26日	2,100
33	ジャーヴィス、ジョン、セント・ヴィンセント伯	海軍元帥	1823年 3 月26日	2,100

*1：費用の単位はポンド。
*2：ウェストミンスタ寺院からセント・ポール大聖堂への配置変更をもとめる上奏文が決議された。
典拠：*Journals of the House of Commons; House of Commons Parliamentary Papers*, xxxvi (1837–8), p.471; xxvi (1842), p.505; The National Archives, The Treasury, Long Papers, T1/4029.19961, 26118.

彫刻家	記念の理由
ロッシ、ジョン・チャールズ・フェリクス	②戦死：西インド諸島グァドループ島沖でのフランス艦との戦闘（1795年1月5日）
ベイコン、ジョン（2世）	④その他：1794年6月3日、グァドループ島で病死・埋葬。その後、遺骸がフランス軍によって暴かれ侮辱されたことが記念の理由となる
バンクス、トマス	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：キャンパダウンの戦い（1797年10月11日）
バンクス	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：ナイルの戦い（1798年8月1日
フラクスマン、ジョン	③生前の傑出した功績：1799年8月5日、ロンドンにて死去。「栄光の6月1日」の戦い（1794年）の勝者
ロッシ	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：コペンハーゲンの戦い（1800年4月2日）
ウェストマコット、サー・リチャード	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：アレクサンドリアの戦い（1801年3月21日）
フラクスマン	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：トラファルガルの戦い（1805年10月21日）
ウェストマコット	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：トラファルガルの戦い（1805年10月21日）
ベイコン	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：トラファルガルの戦い（1805年10月21日）
ロッシ	③生前の傑出した功績：1805年10月5日、インドにて病死。インド、アイルランド統治やアミアンの和約締結における功績から記念される
ベイコン	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：ラ・コルニャの戦い（1809年1月16日）
マニング、サミュエル	②戦死：インド洋セイロン島沖でのフランス艦との戦闘（1808年3月9日）
ウェストマコット	③生前の傑出した功績：地中海艦隊総司令官在任中の1810年3月7日、ヴィル・ド・パリ号艦上にて病死。ネルソンの副司令官としてトラファルガルの戦いに参戦
ロッシ	③生前の傑出した功績：1792年5月24日、ロンドンにて死去。セインツの戦い（1782年4月12日）の勝者
チャントリ、サー・フランシス・レガット	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：アルブエラの戦い（1811年5月16日）
ベイコン	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：タラベラの戦い（1809年7月27–28日）
ベイコン	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：シウダ・ロドーリゴの戦い（1812年1月7–20日）
スミス、ジェイムズ	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：サラマンカの戦い（1812年7月22日）
ウェストマコット	②戦死：クィーンズトン・ハイツの戦い（1812年10月13日）
チャントリ	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：ヴィトリアの戦い（1813年6月21日）
チャントリ	②戦死：サラマンカ（1812年6月27日）
ケンドリク、ジョゼファス	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：アルブエラの戦い（1811年5月16日）
ケンドリク	②戦死：バルティモア（1814年9月12日）
ウェストマコット	②戦死：ニュー・オーリンズの戦い（1815年1月8日）
ガハガン、セバスティアン	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：ワーテルローの戦い（1815年6月18日）
シード、ウィリアム	①感謝決議の対象となった戦いで戦死：ワーテルローの戦い（1815年6月18日）
チャントリ	②戦死：カルンガの戦い（1814年10月31日、ネパール）
ホッパー、ウィリアム	②戦死：バイヨンヌ（1814年4月14日）
チャントリ	②戦死：ベルヘン・オプ・ゾームの戦い（1814年3月8日・9日）
ロッシ	③生前の傑出した功績：1790年7月6日、アーヘンにて死去。ジブラルタル包囲戦（1779–83年）における功績から記念される
ウェストマコット	③生前の傑出した功績：1804年8月4日、コーンヒルにて死去。キャンパダウンの戦い（1797年10月11日）の勝者
ベイリ、エドワード・ホッジズ	③生前の傑出した功績：1823年3月13日、エセックスにて死去。サン・ヴィセンテ沖の戦い（1797年2月14日）の勝者

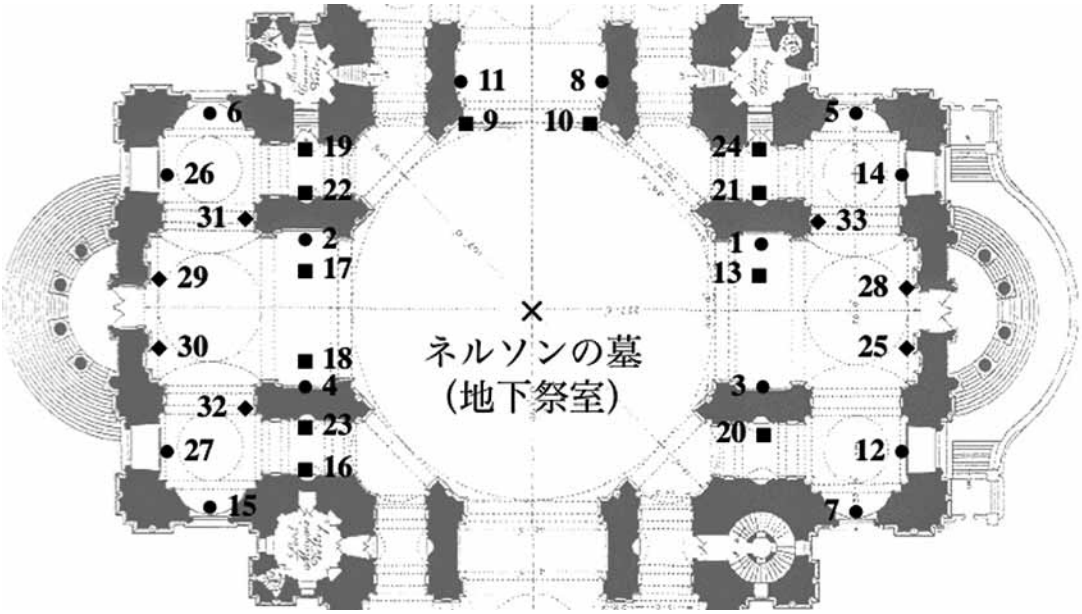

図1　セント・ポール大聖堂に建立された軍人のモニュメント

● 3,150 ポンド以上の予算で建立されたモニュメント
◆ 3,150 ポンド未満の予算で建立されたモニュメント
■ 3,150 ポンド未満の予算で建立されたタブレット型のモニュメント
典 拠：Anon., *Popular description of St Paul's Cathedral, including a brief history of the old and new cathedral, with explanations of the monumental designs, and other interesting particulars,* 18th edn (1829), pp.vi-vii; 14–42.

表2　議会決議により建立されたモニュメント

(1) ウェストミンスタ寺院

	氏　　名	位　階	決　　議
1	コーンウォール、ジェイムズ	海軍大佐	1747年 5 月28日
2	ウルフ、ジェイムズ	陸軍少将	1759年11月22日
3	ピット、ウィリアム、チャタム伯 (大ピット)	政 治 家	1778年 5 月11日
	マナーズ卿、ロバート	海軍大佐	
4	ブレア、ウィリアム	海軍大佐	1782年 5 月24日
	ベイン、ウィリアム	海軍大佐	
5	モンタギュ、ジェイムズ	海軍大佐	1794年 6 月16日
6	ハーヴィ、ジョン	海軍大佐	1794年 7 月10日
	ハット、ジョン	海軍大佐	
7	ピット、ウィリアム (小ピット)	政 治 家	1806年 1 月27日
8	パーシヴァル、スペンサ	政 治 家	1812年 5 月15日
9	ピール、サー・ロバート	政 治 家	1850年 7 月15日
10	テンプル、ヘンリ・ジョン、パーマストン子爵	政 治 家	1866年 2 月23日
11	ディズレイリ、ベンジャミン、ビーコンズフィールド伯	政 治 家	1881年 5 月11日
12	グラッドストン、ウィリアム・ユーアート	政 治 家	1898年 5 月20日
13	セシル、ロバート・ガスコイン、ソールズベリ侯	政 治 家	1904年 5 月18日

(2) グリニッジ王立海軍病院

	氏　　名	位　階	決　　議
1	ペルー、エドワード、エクスマス卿	海軍大将	1842年 8 月10日
2	ソーマレズ、ジェイムズ、ソーマレズ卿	海軍大将	1842年 8 月10日
3	スミス、サー・ウィリアム・シドニ	海軍大将	1842年 8 月10日

典拠：*Journals of the House of Commons*.

は、議会によるモニュメント建立の対象となったのは、海軍であれば大佐、陸軍であれば少将以上の位階をもつ高級士官層にほぼ限定されていたということである。その当時、海尉（Lieutenant）や陸軍の佐官・尉官、下士官、准士官、一般兵士が記念されることはほとんどなかった[12]。高級士官のみならず、広く将兵たちを記念・追悼するモニュメントが大聖堂に建立されるようになるのは、1850年代のクリミア戦争を待たねばならない[13]。

議会による軍人のモニュメント建立の原則や基準について、より立ち入って検討しておく。表1でしめしたように、これは4つのカテゴリに分類して考えることができる。軍人を記念・追悼するにあたり、何よりも重視されたのは、戦場における死、なかでも「国の大義にかかわる戦い」における「勝利の瞬間」の死であった[14]。それは、貴族院・庶民院の両院で、感謝決議（the vote of thanks）の対象となった戦いで命を落とした軍人を記念するために、モニュメントが建立されたことを意味する[15]。ホレイシオ・ネルソンやサー・レイフ・アバークロンビ、サー・ジョン・ムーアのようなナポレオン戦争時代の著名なイギリスの英雄をはじめ、この第1のカテゴリに該当するモニュメントが最も数が多く、16体と全体の約半数を数える。また、議会の審議においては、戦死した士官の働きや技能、卓越したリーダーシップ、愛国心がイギリス国民の模範になるものとして強調された。そのかぎりでは、まさしくモニュメントとは、「最も安価にして、その鼓舞するところは最も強力な」報償であったのである[16]。たとえば、ネルソンのモニュメント建立を提案したさい、戦争・植民地担当大臣であったカースルレイは、こう述べている。

> ［海軍士官という］職業にとって、彼は学ぶべきモデルになると考えざるをえません。その長い生涯をつうじて彼がしめしたのは、断固とした忍耐強さ、揺らぐことのないわが国への貢献を成し遂げたことでした。……ネルソン卿の生涯と業績は、イギリス海軍を鼓舞し続けることでしょう[17]。

第1のカテゴリにたいして、感謝決議の対象となった戦いではなくとも、議会は戦死した士官の

---

[12] ナポレオン戦争の直後、トラファルガルとワーテルローの戦いに参加した全将兵を記念するために、議会において戦争記念碑の建立が決議されたものの、戦後の深刻な不況や政治・社会不安を受けて、結局建立が実現することはなかった。*Parliamentary Debates,* 1st Series（以下、*PD*と略記する）, xxxi, cols.1049–57: Commons, 29 June 1815; xxxii, cols.311–26: Commons, 5 February 1816.

[13] Roger Bowdler and Ann Saunders, 'The post-reformation monuments', in Derek Keene, Arthur Burns and Andrew Saint (eds), *St Paul's: the cathedral church of London, 604–2004* (New Haven, 2004), pp.269–92, esp. pp.285–6.

[14] E.g., *PD*, vi, cols.48–54: Commons, 27 January 1806; x, col.788: Commons, 29 February 1808; xiv, col.611: Commons, 18 May 1809.

[15] 1688–9年の名誉革命以来、議会の伝統的な名誉の授与であった感謝決議は、フランス革命・ナポレオン戦争時代に採択数が急増した。それにあわせて、モニュメントの建立件数も増加した。

[16] *PD*, x, col.788: Commons, 29 February 1808. Cf. *The Monthly Magazine*, xx (1806), pp.497–9.

[17] *PD*, vi, col.102: Commons, 28 January 1806.

モニュメントを建立することがあった。この第２のカテゴリには、海軍士官であればロバート・フォークナとニコラス・ハーディングの２名があてはまる。陸軍士官の場合は、1810年以降に７名が記念されていることが確認される。これは、従来の慣習的な議会による栄誉の授与が拡大したことを意味していた。その背景には、士官の遺族や戦友たちの心情への配慮があったことだろう。ふたたびカースルレイの見解をみておく。「名声へのメモリアルを受け取る以上に、……戦死した士官の友人や遺族の感情を和らげることのできる優れた働きへの記念というものはありません」[18]。

その一方で、当時の議会において軍人のプレゼンスが増大していたことも無視できない。G.P. ジャッドやR.G. ソーンらの研究が指摘するように、19世紀初頭、庶民院議員の約20–25パーセントは陸海軍士官が占めており、最大の専門職集団を構成していた[19]。民兵や義勇兵の士官経験者をふくめると、議員たちの半数近くが何らかのかたちで軍務を経験していたと考えられる。このような議員の構成をふまえた場合、モニュメント建立の提案にあたり、士官の遺族や友人、同僚からの要望がなかったと考えるのは不自然であろう。ウェリントン公の義弟で1812年戦争で戦死したサー・エドワード・パケナム将軍のモニュメント建立のために、アイザック・ガスコイン将軍が議会に働きかけたのが、そうした例のひとつである[20]。なるほどその意味では、この軍人のコメモレイションは、リンダ・コリのいう「排他的な英雄崇拝」のあらわれとみなすことができよう[21]。

戦死という理由ばかりで、軍人のモニュメントがセント･ポール大聖堂に建立されたわけではなかった。生前の傑出した功績から、議会がモニュメントを建立して軍人の死を追悼することもあったのである。なお、ここでいう生前の功績とは、当時の考えにしたがえば、議会による感謝決議の対象となったイギリス軍の勝利への貢献を意味する。この第３のカテゴリには、ロドニやヒースフィールド、ハウ、コリングウッド、セント・ヴィンセント、ダンカンがあてはまる。コーンウォリスにかんしては後述するが、軍務・政務双方の功績から記念されたものとして、ひとまずはこのカテゴリにふくめて考えておく。

ここに名前をあげた軍人たちは、いずれもアメリカ独立戦争やフランス革命戦争、ナポレオン戦争で活躍した、とくに知名度の高い海軍・陸軍の英雄たちである。ただし、彼らの功績と名声から、この原則による軍人のモニュメント建立が当然であったとみなすべきではない。むしろそれは、例外的なことと当時考えられていたのである[22]。議会によるコメモレイションで、自明の原則とされていたのは、戦場における栄光ある死と英雄的な自己犠牲、「祖国のために死ぬこと」であった。

---

[18] *PD*, xxvi, col.1198: Commons, 13 July 1813. この審議では、佐官であるにもかかわらず、ヘンリ･カドガンとサー･ウィリアム・マイアーズの２名のモニュメント建立も決議された。

[19] G.P. Judd, *Members of Parliament, 1734–1832* (Hamden: CT, 1972, first published in 1955), p.88; R.G. Thorne (ed.), *The history of Parliament: the House of Commons, 1790–1820*, 5 vols (1986), i, pp.306–13.

[20] *Morning Post,* 25 May 1815, p.2; *PD*, xxxi, cols.613–4: Commons, 5 June 1815. ガスコインは、リヴァプール選出の議員で、奴隷貿易・奴隷制廃止運動の強力な反対者として知られた人物である。

[21] Colley, *Britons*, pp.180–2.

[22] *PD*, x, cols.872–3: Commons, 3 March 1808.

生前の功績からもっぱら記念されたのは、海軍士官であることにも注意を払う必要があるだろう。そこには、海軍に含意されるパトリオティズムを政治的に利用しようとするピットとその後継内閣の意図があったと考えられる[23]。ハウのモニュメントがセント・ポール大聖堂に建立された理由は、彼が「栄光の６月１日」の戦いの勝者であったからだけではない。1797年の海軍感謝祭において、国民の士気高揚のために、ハウの勝利の記憶を政治的に利用しようとした政府にすれば、彼のモニュメント建立は当然の帰結であった[24]。また、ネルソンの親友で、トラファルガルでは副司令官をつとめたコリングウッドのモニュメント建立の背景には、1809年から翌1810年という軍事的失態やスキャンダルがあいついだ時期において、ネルソンとトラファルガルの記憶を想起させることで、政府の求心力を高めるねらいがあったと考えられる[25]。このように、そのときどきの政治状況を無視しては、議会によるコメモレイションの意義を考えることはできない。

２．反革命戦争のプロパガンダ

前章では、議会によるモニュメント建立をめぐる原則や基準にかんして、考察を進めた。しかし、先にあげた３つのカテゴリのいずれにも該当しない軍人のモニュメントが、セント・ポール大聖堂には１体存在する。それは、陸軍少将トマス･ダンダスの記念･追悼を目的としたものである。1795年６月５日、戦争・植民地担当大臣ヘンリ・ダンダスがその前年に死去した将軍のモニュメント建立の動議を提出し、野党の反対を受けることなく満場一致で決議された[26]。ただし、ダンダスはフランスとの戦争で戦死したわけではなかった。また、1794年５月に議会から感謝決議の栄誉を受けていたとはいえ[27]、戦史に残るような功績をあげたわけでも、高い名声を誇った士官というわけでもなかった。そのために、たとえばジョージ･ルイス･スミスは、セント・ポール大聖堂とウェストミンスタ寺院で記念される偉人とモニュメントを解説した著作のなかで、ダンダスへの自身の不明を読者に断っているほどである[28]。そのような彼がなぜ、議会によるコメモレイションの対象となったのだろうか。

この問いを考えるにあたり、まずはダンダスの経歴を確認しておく[29]。トマス・ダンダスは、1750年にスコットランドはスターリングシァの古くからのジェントリの家に生まれた。彼の叔父の

---

[23] これにかんしては、拙稿「ネルソンの国葬」も参照されたい。

[24] *The Parliamentary Register, or, History of the Proceedings and Debates of the Houses of Lords and Commons*（以下、*PR* と略記する）, the session of 18th parliament, x, pp.94–5: Commons, 3 October 1799.

[25] *PD*, xvii, cols.511–3: Commons, 8 June 1810.

[26] *PR*, xli, pp.512–3: Commons, 5 June 1795.

[27] *PR*, xxxviii, pp.328–30: Commons, 20 May 1794.

[28] George Lewis Smyth, *The monuments and genii of St Paul's Cathedral and Westminster Abbey; comprising naval & military heroes, poets, statesmen, artists, authors, &c. &c. &c.* (1826), p.417.

[29] J.A. Houlding, 'Dundas, Thomas (1750–1794)', *Oxford Dictionary of National Biography*（以下、*ODNB* と略記する）<http://0-www.oxforddnb.com.catalogue.ulrls.lon.ac.uk/view/article/8261> [accessed 24 October 2012].

ひとりで有力な東インド利害関係者であったサー・ロレンス・ダンダスの影響のもと、1766年に陸軍の士官職を手に入れたのち、順調に昇進してアメリカ独立戦争に従軍したほか、1771年にはオークニとシェトランドを代表する庶民院議員にも選出された。1793年にフランス革命戦争が勃発すると、サー・チャールズ・グレイとサー・ジョン・ジャーヴィス（のちのセント・ヴィンセント伯）によるフランス領西インド諸島遠征にダンダスもくわわり、軽歩兵指揮官として、マルティニク島やセント・ルシア島、グァドループ島の攻略にあたった[30]。1794年に彼はグァドループ島総督に任命されたものの、６月３日に黄熱病のため病死し同島に埋葬された。

1794年12月、フランス共和国軍によってグァドループ島が奪還されることになる。このとき、ダンダスの遺体は墓より暴かれ、野に晒されたのである。そればかりか、国民公会の派遣議員ヴィクトル・ユーグは、彼の墓があった場所に、次のような碑文を記したモニュメントを建立するよう布告したのだった。「共和主義者の勇敢さによって自由を取り戻したこの土地は、［残忍な］ジョージ３世に仕えた陸軍少将にしてグァドループ島総督、トマス・ダンダスの遺体によって汚された。彼の犯した数かずの罪を想起し後世に伝えるにあたり、人びとの怒りは彼の遺体を野に晒し、このモニュメントを建立するように命じたのである」。この布告がイギリス本国に伝わったとき、大きな衝撃を惹き起こしたことだろう[31]。議会に提出された上奏文にも記された「グァドループ島に埋葬された彼の遺体が受けた野蛮な辱め」、それこそが、ダンダス将軍のモニュメント建立の大きな理由であった[32]。

当時のイギリスにおいて、フランス領西インド諸島への遠征と占領後の処理をめぐって賛否が分かれていたことも、ダンダスのモニュメント建立の重要な背景をなしている[33]。この遠征は、当初こそイギリス軍の勝利に終わり、マルティニクやグァドループなど主要なフランス植民地の占領に成功した。しかしその後は、不穏分子の追放や財産の没収、軍税の徴収など、逸脱ともいえるイギリスの軍政への住民の不満がひどく高まっていた。それは、イギリスの名声や戦争をめぐる大義だけでなく、西インド諸島における利害を損なうものとして、イギリス本国で激しい論争をまねいた

---

[30] 1790年代におこなわれたイギリスによる西インド諸島への遠征については、Michael Duffy, *Soldiers, sugar, and seapower: the British expeditions to the West Indies and the war against Revolutionary France* (Oxford, 1987) をみよ。

[31] *London Packet or New Lloyd's Evening Post,* 8–10 April 1795, p.4; *St James's Chronicle or the British Evening Post,* 11–14 April 1795, p.3. Cf. Cooper Willyams, *An account of the campaign in the West Indies, in the year 1794, under the command of their excellencies lieutenant general Sir Charles Grey, K.B. and Sir John Jarvis, K.B. commanders in chief in the West Indies* (1796), p.148

[32] ダンダスの死後、士官たちのあいだで、募金をつのって彼のモニュメントをウェストミンスタ寺院に建立しようとする動きがみられたことが確認される。British Library, Flaxman Papers, Add MS 39791, fo.1: Copy of the letter from various officers to Colonel Blundell, 3 June 1794. ボウワーズは、フランス軍によるダンダスの遺体にたいする冒涜的な行動との関連からこれに言及しているものの、史料に記された日付が誤りでないかぎり、それはミスリーディングであろう。Bouwers, *Public pantheons,* p.58.

[33] この段落の記述にあたっては、以下の論考におもに依拠した。Joseph M. Fewster, "Tarnished glory': the aftermath of British victories in the West Indies in 1794', *Journal of Imperial and Commonwealth History*, xxi (1993), pp.75–104.

のである。1795年6月2日、ジャマイカ島のプランターの家系の出身で野党ホウィグのジョーゼフ・フォスタ＝バラムは、グレイとジャーヴィス両司令官への譴責動議を議会に提出した[34]。これは否決され、前年に採択されたグレイとジャーヴィスへの感謝決議の妥当性が確認されたが、フランス領植民地への遠征を主導したピット政権は、イギリスの戦争目的や大義を擁護する必要を感じていただろう。ダンダス将軍のモニュメント建立は、政府にとって時宜にかなうものであったのである。

ダンダスのモニュメントの制作は、ジョン・ベイコン2世に委託されたものの、審査委員会がデザインの変更のためにしばしば干渉したことから、完成までおよそ7年もの歳月を要し、1805年秋にようやくセント・ポール大聖堂に配置された[35]。このモニュメントの構成についてみておこう。まず、ダンダス将軍の胸像とそれが置かれた墓棺のすぐそばには、ほかの軍人のモニュメントにもしばしばみられるイングランドのライオンと、名誉のあかしである月桂冠を将軍に授けようとするブリタニア像が配置されている。その左側には、無常観をあらわす女性像と、「わが国の戦争の目的、すなわち、正当で名誉ある平和」をほのめかすオリーヴの枝をもった男子像が置かれていた。

ここであげたアレゴリだけであれば、ダンダスのモニュメントは軍人の死を追悼するものにすぎない。しかし、墓棺にはめこまれたレリーフこそが、このモニュメントにおいて重要な意味をもつ。そこでは、フランス革命政府をあらわす「無秩序（Anarchy）」と「偽善（Hypocrisy）」にたいして、「自由」を護ろうとするブリタニアが描かれていた。つまり、イギリスのナショナル・アイデンティティの根幹をなす「自由」が、フランスという極端な共和主義を媒介に再定義されたことが、モニュメントで表象されていたのである。このように、ダンダス将軍のモニュメントはフランスの革命政府の野蛮さ、残忍さを強調し、対仏戦争におけるイギリスの大義を正当化する「反革命戦争のプロパガンダ」としての性格をもちえたのだった。もっとも、古典の教養や知識をもたない人びとにとって、ダンダスのモニュメントを理解するのはたやすいことではなかった。それゆえに、ベイコン自身がロンドンの日刊紙に寄稿して、モニュメントの構成とアレゴリの意味を読者に説明しなければならなかったのである[36]。

反革命戦争のプロパガンダとしての役割にくわえて、ダンダス将軍のモニュメントにはもうひとつの役割が期待されていた。それは、同じ1795年に議会で建立が決議されたロバート・フォークナ艦長のモニュメントがもつ意味を相対化することである。ダンダスと同様に西インド諸島遠征で亡くなったフォークナのモニュメント建立をめぐっては、首相ピット不在の状況で、フォックス派ホウィグが積極的に賛同し、その結果議会では表決が分かれたという経緯があった。そこで、国民全体の合意で建立されたわけではなく、フォークナが党派的な「野党の英雄」であることをしめすために、碑文の冒頭部は「イギリス議会によって／このモニュメントは建立された（THIS MONUMENT

[34] *PR*, xli, pp.461–502: Commons, 2 June 1795.

[35] The National Archives（以下、TNAと略記する）, The Treasury, T1/955.6480: 19 November 1805, John Bacon to Nicholas Vansittart.

[36] E.g., *The Times,* 7 January 1806, p.3; *Morning Chronicle,* 7 January 1806, p.3.

WAS ERECTED/BY THE BRITISH PARLIAMENT）」と刻まれていた[37]。これにたいして、ダンダスのモニュメントは満場一致で建立が決議されたために、大蔵省はベイコンにモニュメントの碑文を次のように刻むよう要求したのである。「ダンダス将軍のモニュメントに最もふさわしい碑文とは、庶民院の決議文であろう。それゆえに［ベイコンに］同じ文章を刻むよう命じるものである」[38]。完成したモニュメントの碑文にはこうある。「このメモリアルの建立にあたり／次のような庶民院の表決をみいだすであろう／1795年６月５日に満場一致で決議された（WILL BE FOUND IN THE FOLLOWING VOTE OF THE HOUSE OF COMMONS / FOR THE ERECTION OF THIS MEMORIAL. / JUNE 5TH, 1795. RESOLVED NEMINE CONTRADICENTE）」。このような碑文から、ダンダスのモニュメントは、フォークナのモニュメントとは異なって、国民の合意により建立されたこと――それは、革命フランスとの戦争が国民の広範な支持のもと進められたということを含意していた――をみる人びとに伝えようとしたのである。

３．スコットランドらしさの表象

フランス革命・ナポレオン戦争時代におけるイギリス陸軍の大きな特徴として、スコットランド出身者がその人口に比して数多く存在していたことがあげられる。このことは、将校団の構成によりはっきりと認められる。ジョン・クックスンの推計によると、ナポレオン戦争の終盤の1813年には、スコットランド出身者が約４分の１を占めていたとされる[39]。戦時をつうじて、将校の規模がいちじるしく拡大したことをふまえれば、どれほどスコットランドが陸軍に人材を提供したのかが推察されよう。リンダ・コリによれば、スコットランドは七年戦争以来「帝国の武器庫」だった[40]。ハイランド（スコットランド高地地方）出身者をめぐる評価や認識が、野蛮人・反逆者という否定的なものから、イギリスの国制や帝国に忠実で勇敢な戦士という肯定的なものに変化したのも、七年戦争以降のことであった[41]。

セント・ポール大聖堂においても、スコットランド出身の軍人のモニュメントは少なからず認められる。出身地が判明する35名の士官のうち、スコットランド出身者は９名であった。そのなかには、サー・レイフ・アバークロンビ将軍とサー・ジョン･ムーア将軍という著名な軍人も含まれている。彼ら２人は、ネルソンと同じく総司令官でありながら戦死したことから、先述した第１のカテゴリの顕著な例としてあげられる。以下では、彼らのモニュメントにおいて、スコットランド人の功績がどのように記念され表象されたのかを検討しよう。

七年戦争以来の歴戦の将であったアバークロンビは、1801年３月21日のアレクサンドリアの戦い

[37] フォークナの戦死にたいする当時の世論については、Jenks, *Naval engagements*, pp.77–88 をみよ。

[38] TNA, T29/86, fo. 266: 14 March 1806.

[39] Cookson, *The British armed nation*, p.127.

[40] Colley, *Britons*, p.120.

[41] E.g., Robert Clyde, *From rebel to hero: the image of the Highlander, 1745–1830* (East Linton, 1995).

でフランス軍に勝利をおさめたものの、重傷を負い、その１週間後の３月28日に死去した[42]。この勝利が、ナポレオンにたいするイギリス陸軍の最初の勝利であったことから、人びとの大きな反応を惹き起こしたことは想像に難くない。議会において感謝決議とアバークロンビのモニュメント建立を提案した首相ヘンリ・アディントンは、「イタリアの征服者［ナポレオン］はわが陸軍を前に逃亡し、その軍旗を戦利品として残していったのです」と発言したほか、『ジェントルマンズ・マガジン』誌も次のように記している。「それ以来、庶民院によってセント･ポール大聖堂へのモニュメント建立が決議された。モニュメントには、ボナパルトの無敵の軍旗が置かれることだろう」（傍点は筆者によるもの。原文ではイタリック）[43]。アバークロンビの勝利と戦死は、これまでの陸軍の汚名を雪ぐに十分であっただけでなく、イギリスの戦争目的、「名誉ある永続的な平和」を望ましいかたちで達成するように思われたのである。

アバークロンビのモニュメントの制作は、当時27歳とまだ若い彫刻家であったリチャード・ウェストマコットに委託された。このモニュメントは、セント・ポール大聖堂の軍人のモニュメントのなかでも、最も優れた作品のひとつと評価されている。それは、ハウ提督やネルソン提督のモニュメントと同じように、6,300ポンドの費用で建立された大型のモニュメントでありながらも、抽象的なアレゴリをあまり用いない自然で写実的なデザインであったという理由による。先述のスミスもこう記している。「大聖堂に建立された同じ彫刻家の作品のなかで最も優れているだけでなく、さらなる称賛を与えるに値する。そのデザインはふさわしく、動きも自然だからだ」[44]。アレゴリといえそうなのは、台座の両端にすえられた２体のスフィンクス像で、アバークロンビが戦死したエジプトをしめしていた。アバークロンビ自身も、古代ローマの鎧姿ではなく、その当時の軍服をまとった姿で表現されている。

さらに、アバークロンビのモニュメントで注目すべきなのは、タータンのキルトを着用したハイランド連隊の兵士の存在である[45]。おそらくそれは、ハイランド連隊のひとつで、アレクサンドリアの戦いでフランス軍の軍旗を奪うという功績をあげた第42連隊、通称「ブラック･ウォッチ（Black Watch）」連隊の兵士であろう[46]。将軍が狙撃され、馬上から兵士の腕にくずれおちる瞬間がダイナミックにあらわされているほか、その足下には、倒れたフランス軍の兵士と軍旗が踏みしだかれているというのが、モニュメントの構成であった。

---

[42] 1801年のイギリスによるエジプト遠征にかんしては、Piers Mackesy, *British victory in Egypt, 1801: the end of Napoleon's conquest* (New York, 1995) をみよ。

[43] *PR*, xv, pp.324–7: Commons, 18 May 1801; *Gentleman's Magazine*, lxxi (1801), pp.480–1.

[44] Smyth, *Monuments and genii*, p.1; *The Morning Chronicle*, 31 December 1814, p.3.

[45] タータンのキルトやバグパイプなど、ハイランドの伝統の創造については、以下を参照。H.R. Trevor-Roper, 'The invention of tradition: the Highland tradition, Scotland', in E.J. Hobsbawm and Terence Ranger (eds), *The invention of tradition* (Cambridge, 1983), pp.15–41［前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』（紀伊國屋書店、1992年）］.

[46] アレクサンドリアの戦いには、第42連隊のほかに、第79連隊と第92連隊という2つのハイランド連隊も参加していた。これらの連隊は、のちに1806年のネルソンの国葬で葬送行進の先導役をつとめることで、みる人びとにエジプトにおけるイギリスの勝利を想起させたのである。拙稿『ネルソンの国葬』、185–6頁。

ところで、アレクサンドリアの勝利とアバークロンビの戦死は、ウルフ将軍の死（1759年）やナイルの戦い（1798年）におけるネルソンの勝利と同じように、人びとの熱狂をひきおこし、画家や詩人たちの想像力をかきたてることになった。アバークロンビのモニュメントとの関係から、ここでは２つの絵画に言及しておく。ひとつは、ロイアル・アカデミーの肖像画家、ジェイムズ・ノースコートの「アバークロンビの死」、もうひとつは、フィリップ・ジャック・ド・ラウザーバーグの「アレクサンドリアの戦い」である。どちらの絵画も、1802年には完成して一般に公開されていたと思われる[47]。

まず、ノースコートの作品は、戦死したアバークロンビ将軍とその士官たちを描いた集団肖像画である。その構成とは、馬上のアバークロンビが狙撃され倒れるところを、彼の息子であるアレクザンダ・アバークロンビ大佐に抱きかかえられるというもので、その足下には、フランス軍旗があるのを目にすることができる。彼らの周囲には、副司令官サー・ジョン・ムーア将軍をはじめとする士官たちが描かれていた。息子のアバークロンビ大佐か、ハイランド連隊兵士かという違いはあるにせよ、この絵画とウェストマコットによるモニュメントの構成がたがいによく似ていることに気づかされる。ノースコートのアトリエか、1802年のロイアル・アカデミーの春期展覧会でこの作品を目にしたウェストマコットが、モニュメントの制作にあたり参考にしたと考えられる。

次に、ラウザーバーグの「アレクサンドリアの戦い」は、戦いそれ自体よりも、将軍の戦死に焦点をあてた戦争画であった[48]。絵画の左側にはイギリス軍とフランス軍とのあいだの激戦が、右側にはアバークロンビがムーアをはじめ士官たちに囲まれて描かれている。だが、この絵画で目をひくのは、絵画のほぼ中央に描かれたハイランド連隊、第42連隊の兵士である。その右側には、フランス軍から奪った軍旗があるのが確認される。アバークロンビのモニュメントでもそうだが、この当時の絵画や銅版画などの作品におけるハイランド連隊兵士の存在は、将兵たちがスコットランド出身であることをしめすだけではなく、戦争での彼らの働きぶりや功績を称えるというねらいがあった。さらにこうした作品は、フランス革命・ナポレオン戦争時代において、スコットランド人の勇敢さや連合王国への忠誠という「神話」を形成するにあたり貢献したことだろう[49]。

しかしながら、スコットランドをめぐる表象は、もうひとりのスコットランド出身の英雄、サー・ジョン・ムーアのモニュメントにみることはできない。ムーアが戦死した1809年１月のラ・コルニャの戦いには、先述した第42連隊や第91連隊といったハイランド連隊が参加していた。またムーアは、ハイランド連隊にとくに深い愛着を感じていた軍人として知られている。1804年、バス勲章を授与され、新たに紋章のデザインを模索したときに、彼はその盾持ちのひとりにハイランド連隊の兵士を選んだほどであった[50]。むろん、スコットランド出身の軍人だからといって、スコッ

---

[47] *The Times*, 23 March 1802, p.3; 20 May1802, p.3.

[48] Fintan Cullen, 'The art of assimilation: Scotland and its heroes', *Art History,* xvi (1993), pp.600–18, esp. pp.609–10.

[49] Cf. Clyde, *From rebel to hero*, chapter 6; J.E. Cookson, 'The Napoleonic wars, military Scotland and Tory Highlandism in the early nineteenth century', *Scottish Historical Review*, lxxviii (1999), pp.60–75.

[50] John Sweetman, 'Moore, Sir John (1761–1809)', *ODNB* <http://0-www.oxforddnb.com.catalogue.ulrls.lon.ac.uk/view/article/19132> [accessed 24 October 2012].

トランドらしさの表象がモニュメントや絵画でつねに用いられるわけではない。しかしそれが、慎重に避けられたという推定も成立するのではないだろうか。この点にかんして、ムーアの戦死や記念にいたる経緯から検討する。

1761年にグラースゴーで生まれたムーアは、アメリカ独立戦争やフランス革命戦争で頭角をあらわし、アバークロンビ将軍の指揮下で何度も戦ったことのある士官だった。1801年のアレクサンドリアの戦いにおいても、負傷しながら勝利に貢献したことが、先にあげた絵画にあらわれている。スペインの半島戦争では、物議をかもした1808年のシントラ協定ののち、ムーアはイギリス遠征軍の指揮を執ることになった[51]。しかし、ナポレオンが大軍を率いてスペインに侵攻してきたために、ラ・コルニャまでの苦しい退却戦を彼は余儀なくされたのである。1809年１月16日、ムーアの軍勢はニコラ･スルト元帥率いるフランス軍と交戦し、かろうじて撃退してイベリア半島からの退却に成功したものの、戦いのさなか、ムーアは戦死したのである[52]。

度重なる軍事的失態から、当時のイギリスの世論は政府に不利に作用していた。ホウィグやラディカルたちは、イベリア半島からのイギリス軍の退却とムーアの戦死は、政府の失策の結果とみなしたのである。貴族院・庶民院両院における感謝決議、ムーアのモニュメント建立の提案はいずれも満場一致で決議されたとはいえ、審議では野党による政府への批判は避けられなかった。ヘンリ･ペティ卿が、「有罪の責を生きている人間から責任のない死者に転嫁するという卑劣な試みは、男らしく正直な怒りをもって追求されねばなりません」と庶民院で政府を攻撃しただけでなく[53]、貴族院でも同様の批判がみられた。とくに興味深いのは、トマス・アースキン卿の以下の発言である。

> ［イングランドとスコットランドの］両国は、長らくみられたあらゆる民族的偏見を止めるべく連合したわけですが、統合された帝国（the united empire）の栄光に小さなわが祖国が、その分を超えて貢献していることに、誇りと喜びを感じたとしてもお許しいただけることでしょう。わたしは、サー・ジョン･ムーアがスコットランド出身であることに誇りと喜びを感じています。ベアードにたいしてもそうですし、ホープも、フレイザとマッケンジも、アンストルーザも、またファーガスンもスコットランドの出身です。しかし、そうした人材や資源が、指導する立場にある人びとの資質の完全な不足から、徹底的に無駄に費やされ失われたことを知るにつれ、この祖国への誇りはわたしの憤りをかきたてるだけなのです[54]。

アースキンはスコットランド出身の貴族で、ホウィグの政治家であった人物である。彼の発言にみ

---

[51] シントラ協定とそれをめぐる論争については、Peter Spence, *The birth of romantic radicalism: war, popular politics and English radical reformism, 1800–1815* (1996), chapter 5に詳しい。

[52] Christopher J. Summerville, *March of death: Sir John Moore's retreat to Corunna, 1808–9* (2003).

[53] *PD*, xxii, cols.143–4: Commons, 25 January 1809.

[54] *PD*, xxii, cols.136–7: Lords, 25 January 1809.

られるように、イベリア半島への遠征には、数多くのスコットランド出身の士官たちが参加していた。しかし、サー・デイヴィッド・ベアードが重傷を負い、ロバート・アンストルーザが戦病死するなど、ムーア以外にも犠牲は大きかった。ここから、ムーアの記念・追悼にあたっては、スコットランド出身の将兵の血が無為に流されたものとして、政府にたいするスコットランド人の批判や不信が強まる可能性があったことも指摘できよう。

その後、ムーアのモニュメントは、ダンダスのモニュメントを手がけたジョン・ベイコンに制作が委託され、1815年に完成した[55]。このモニュメントは、戦死した将軍を埋葬する情景をあらわしたものであった。まず「勇気」と「勝利」の像が、月桂冠をそなえつつ、軍服をまとったムーアを墓に埋葬しつつある。「勇気」の背後にみえるのは、スペインの才能をあらわす子どもの像で、軍旗をムーアとともに埋葬しようとしていた。

ただし、ムーアのモニュメントの碑文には、議会が建立したモニュメントで数多くみられる「国費により建立された（Erected by the Public Expense）」、もしくは「国民によって建立された（Erected by the Nation）」、「ナショナル・モニュメント」という一文は記されてはいない。ごく簡単に、ムーアの軍歴とラ・コルニャでの戦死が記されただけであった[56]。また、アバークロンビのモニュメントとは異なり、ハイランド連隊兵士の像が用いられることはなかった。それは、スコットランド人の勇敢さや功績だけでなく、犠牲も強調することにつながり、望ましいことではなかっただろう。このように、同じスコットランド出身の軍人のモニュメントとはいえ、アバークロンビのモニュメントが勝利と軍事的栄光の記憶を想起したのとは対照的に、ムーアのモニュメントは、戦死した将軍にたいする深い追悼の意だけをあらわしていたのである[57]。

４．帝国の英雄のモニュメント

かつての対仏戦争と同様に、フランス革命戦争・ナポレオン戦争もまた、戦争の舞台はヨーロッパに限定されてはいなかった。1790年代の西インド諸島の遠征にはじまり、インドのマイソール戦争とマラータ戦争、オランダ領ケープへの攻撃、失敗に終わったブエノスアイレス遠征、北アメリカ大陸における1812年戦争など、戦争はグローバルな規模で展開したのである[58]。その一方で、

---

[55] TNA, T29/106, fo. 58: 8 June 1810; Kathryn Cave, Kenneth Garlick and Angus Macintye (eds), *The diary of Joseph Farington,* 16 vols (New Haven, 1979–84), x, pp.3669–70: 14 June 1810.

[56] ムーアのモニュメントの碑文は次のように記されている。'Sacred to the Memory of / Lieutenant-General Sir John Moore, K.B. / Who was born at Glasgow in the year 1761. / He fought for his country / In America, in Corsica, in the West Indies, / In Holland, Egypt, and Spain; / And on the 16th of January, 1809, / Was slain by a Cannon-ball, / At Corunna'.

[57] セント・ポール大聖堂以外では、生地であるグラースゴーがムーアのモニュメントを建立したほか、フランスのスルト元帥も、その死と勇敢さを悼んで、ラ・コルニャの彼の墓にモニュメントを建立するよう命じた。

[58] Michael Duffy, 'World-wide war and British expansion, 1793–1815', in P.J. Marshall (ed.), *The Oxford history of the British Empire II: the eighteenth century* (Oxford, 1998), pp.184–207; Bruce Collins, *War and empire: the expansion of Britain, 1790–1830* (Harlow, 2010).

ヴィンセント・ハーロウのいうイギリス帝国の「東方への旋回」、すなわち第１次イギリス帝国から第２次イギリス帝国への変容とこの戦争が、ほぼ同時に進んだことにも留意しておかなければならない[59]。もっとも近年の研究が論じているように、帝国の連続と断絶の局面は慎重に考察されねばならないものの[60]、このようなグローバルな規模での戦争とそれにともなう帝国の拡大、植民地統治の変化が、セント・ポール大聖堂における軍人のコメモレイションにどう影響したのかという問題は考察に値しよう。

当時のイギリス陸軍において、帝国の戦場と植民地統治の最前線に立ち続けた軍人としてただちに想起されるのは、チャールズ・コーンウォリス侯である。アメリカ独立戦争の敗軍の将として知られる彼は、ピットのインド法（1784年）にともないベンガル総督に任命され、インド統治の改革にあたった。また第３次マイソール戦争では、ティプー・スルタンを撃破するという戦果をあげ、汚名を雪いだのである。その後はアイルランド総督などの要職を歴任し、1805年にふたたびベンガル総督に任命されたものの、同年10月にインドで病死したのだった。

翌1806年２月３日、コーンウォリスのモニュメント建立が議会で審議された[61]。戦死ではなく、生前の優れた功績からコーンウォリスが記念されたことはすでにふれたが、動議を提出したカースルレイは、マイソール戦争における勝利など、コーンウォリスの戦功には言及することはまったくなかった。国王あての上奏文で強調されていたのは、死の際にいたるまでの彼の「高潔にして汚れなき人格、長年の優れた働き、不屈の熱意と献身」であった。彼はまた、コーンウォリスの功績として、インドとアイルランドの統治、アミアンの条約締結における働きをあげている。以上のような理由から軍人のモニュメント建立が提案されることは、カースルレイ自身が認めたように、すぐれて例外的なことだった。コーンウォリスのモニュメント建立は、ピット父子のような政治家の記念の例もふまえて提案されたと考えられる。

コーンウォリスのモニュメント建立の提案にたいしては、チャールズ・グラントやフィリップ・フランシスのような東インド利害関係者、コーンウォリスをかつて高く称賛した福音主義者、ウィリアム・ウィルバフォースが支持していた。しかし決議にあたり、満場の支持をえることはなかった。審議がおこなわれた1806年２月初旬とは、すでに小ピットが死去し、グレンヴィル卿とチャールズ・ジェイムズ・フォックスを中心とする全人材内閣（Ministry of All the Talents）の成立が目前に迫っていた。そのような時期にコーンウォリスを記念することは、ピット内閣による帝国や外交政策の評価を意味しており、野党系の議員からの不満を惹起しかねなかったのである。なかでも1801

---

[59] Vincent Harlow, *The founding of the second British Empire, 1763–1793,* 2 vols（1952–64）.

[60] E.g., Christopher Bayly, *Imperial meridian: the British Empire and the World, 1780–1830*（Harlow, 1989）; P.J. Marshall, *The unmaking and making of empires: Britain, India, and America, c.1750–1783*（Oxford, 2005）. Cf. Robert Travers, 'Imperial revolutions and global repercussions: South Asia and the World, c.1750–1850', in David Armitage and Sanjay Subrahmanyam（eds）, *The age of revolutions in global context, c.1760–1840*（Basingstoke and New York, 2010）, pp.144–66.

[61] *PD*, vi, cols.120–2: Commons, 3 February 1806; *Journals of the House of Commons*, lxi（1806）, p.24.

年のグレイト・ブリテン＝アイルランド合同はなおセンシティヴな問題であったので、アイルランド選出の議員であるチャールズ・オハラは、モニュメント建立に強く反対した。「その死後の名誉のために、票を投ずることなど決してできません。彼は、アイルランドの利害にとって有害で致命的と思われる交渉をもっぱら主導した人間なのです」。フォックスもまた、アイルランド合同を「わが国の歴史上、最も恥ずべきことのひとつ」と非難したのだった[62]。

コーンウォリスのモニュメントは、ネルソンや小ピットのモニュメントとならんでデザインが選考されたのち、ジョン・チャールズ・フェリクス・ロッシに制作を委託された[63]。庶民院の審議において、コーンウォリスの勝利や戦功よりも、その人格やインド統治における功績が称えられたことを反映するかのように、ロッシによるモニュメントでも、コーンウォリスは軍服姿ではなく、ガーター勲章の正装を身にまとった姿で表現された。また、アジアやオリエントを連想させる複数のアレゴリがつかわれているのが、このモニュメントの特徴である。台座の左側には、イギリスによるインド支配をあらわす槍と盾をもった女性の像が、右側にはインドの２つの大河、ベガレス川とガンジス川を擬人化した女性と男性の像がみられる。とくに後者の女性像は、哀惜の表情でコーンウォリスを仰ぎみており、コーンウォリスのインド統治の公正さ、善政をしめしていた。こうしたアレゴリから、彼のモニュメントでは、帝国支配のもたらす慈善や恩恵が強調されたのである[64]。

イギリス帝国史家ピーター・マーシャルは、18世紀末以降イギリスの帝国支配をめぐる世論が変化し、インド支配がイギリスの自由や国制への脅威ではなく、イギリス人の誇りと自賛の対象になったと論じている[65]。このことは、先述したコーンウォリスのモニュメントとそれをめぐる議会の審議にも認めることができるだろうが、それは問題の一面にすぎず、インド支配をめぐる評価は依然として揺らいでいたと考えられる。1806年の小ピットの死とその後の政治危機を契機にして、ラディカルたちによる「ピット体制（the Pitt system）」や「旧き腐敗」への攻撃が強まり、議会改革や行財政改革が声高に要求されるようになった[66]。さらには、リチャード・ウェルズリ総督時代のインド統治にたいしても、ジェイムズ・ポールがしばしば弾劾動議を提出するなど、批判が高まっていたのである。このウェルズリ弾劾とは、いわばウォーレン・ヘイスティングズ裁判の再演をねらったものだった[67]。急進的なトーリ、ウィリアム・コベットの言葉を借りると、「ピット体制は

---

[62] *PD*, vi, cols.126–8: Commons, 3 February 1806.

[63] Cave, Garlick and Macintye, *The diary of Joseph Farington,* viii, p.2962: 5 February 1807.

[64] ジョージ・ハーディング艦長のモニュメントにおいても、インド人の像が重要なアレゴリとして用いられている。

[65] P.J. Marshall, ‘Cornwallis triumphant’: war in India and the British public in the late eighteenth century’, in Lawrence Freedman, Paul Hayes and Robert O’Neill（eds）, *War, strategy, and international politics: essays in honour of Sir Michael Howard*（1992）, pp.57–74; idem, ‘The making of an imperial icon: the case of Warren Hastings’, *Journal of Imperial and Commonwealth History,* xxvii（1999）, pp.1–16, esp. pp.11–2.

[66] Philip Harling, *The waning of ‘Old Corruption’: the politics of economical reform in Britain, 1779–1846*（Oxford, 1996）; Spence, *The birth of romantic radicalism*.

[67] *PD*, vi, cols.36–41, et passim.

インドへの関心より生じた」のである[68]。

こうした状況にあっては、ときのポートランド内閣はある軍人のモニュメント建立を見送らざるをえなかった。それは、ジェラルド・レイク将軍の記念を目的としたものだった。レイクはもっぱらインドで活躍した軍人で、第2次マラータ戦争における功績から、1804年に感謝決議の栄誉に浴したほか、貴族にも列せられていた。しかし、1808年に彼が死去したのち、彼の遺族への年金授与とモニュメント建立について議会で審議されたところ、ホウィグやラディカルからの強い批判をまねいたのである。バナスタ・タールトン将軍やアーサー・ウェルズリ(のちのウェリントン公)が提案に賛成する一方で、ジョージ・ティエニやフォークストン卿、サー・フランシス・バーデットらは、年金だけでなくモニュメント建立にも反対した。この名誉の対象とは、勝利とひきかえに戦死した軍人だけであると彼らは考えていたのである[69]。またレイクが、インドで巨額の財産を築いていたことも、反対をいっそう強めることになった[70]。最終的には、レイクの遺族への年金授与は決議されたとはいえ、モニュメント建立の提案は撤回されたのである。このときカースルレイは、レイクのみならず、ロドニやダンカンのように生前に優れた功績をあげた著名な高級士官さえもモニュメント建立の対象とはならず、コメモレイションの機会が限定されていることを嘆いた。「死ではなく、功績こそが、報償にふさわしい対象なのです」[71]。レイク将軍のモニュメントとは、ナポレオン戦争時代において、議会で提案されながらも建立が実現しなかった唯一の事例であった。

ところで、インドにおけるイギリスの帝国統治との関係から、コーンウォリスが記念されたのにたいして、北アメリカのイギリス帝国、すなわちカナダとの関係で重要なのは、1812年10月13日のクィーンズトン・ハイツの戦いで戦死したサー・アイザック・ブロック将軍のモニュメントである[72]。これは、ウェストマコットが制作したタブレット型のモニュメントで、アッパー・カナダにおけるブロックの死の情景をあらわしたものだった。またコーンウォリスのモニュメントと同様に、現地の人間をあらわすアレゴリが用いられていた。モニュメントの右側では、ブロックが兵士の腕のなかで息絶えており、左側では、北アメリカの先住民が彼の勇敢さと慈愛にたいして敬意を表しているという構成である。中央には、墓標として石の上に兜と剣が積み上げられ、碑文が刻まれている。このようなデザインから、ブロックのモニュメントは、小規模でアレゴリも限定されているが、同じくカナダで戦死したジェイムズ・ウルフ将軍を主題としたベンジャミン・ウェストの絵画、

---

[68] *Cobbett's Weekly Political Register*, ix, 1 February 1806, cols.144–5.

[69] *PD*, x, cols.786–800: Commons, 29 February 1808.

[70] *The Examiner,* 6 March 1808, p.157; *Cobbett's Weekly Political Register*, xiii, 12 March 1808, cols.385–96.

[71] *PD*, x, cols.872–3: Commons, 2 March 1808; *The Times,* 3 March 1808, p.2.

[72] ブロックの最新の伝記として、Wesley B. Turner, *The astonishing general: the life and legacy of Sir Isaac Brock* (Toronto, 2011)がある。

「ウルフ将軍の死」の構図を模していたことはあきらかであろう[73]。カースルレイが、「[ブロックは]カナダのその地域の住民に信頼をおき」、「遠隔地にある国王陛下の住民にたいして、同じ義務を果たさんとする将来の士官たちを勇気づける模範となったのです」と称えたように、ブロック将軍のコメモレイションでは、北アメリカのイギリス系住民も先住民も等しく守護するという帝国統治のあり方、イギリス軍士官の義務が強調されたといえよう[74]。

ネルソンやコリングウッドのような著名な英雄を別にすれば、ブロックが後世の人びとによってセント・ポール大聖堂でふたたび記念されたことも、注目に値する[75]。1812年戦争で戦死した彼は、カナダのナショナリズムのみならず、カナダとイギリス帝国とのきずなを象徴する人物であったのである[76]。1912年10月、ブロックの没後100周年記念式典が、モニュメントのある大聖堂南翼廊で開催された。イギリスとカナダ両政府の代表やブロックの子孫をはじめ、両国からの参列者たちが集うなか、カナダの通商大臣ジョージ・ユーラス・フォスタは、ブロックに敬意を払い、現在が帝国の絶頂期であることを強調しながらも、次のように演説したのである。

> ブロックがカナダ人でも、完全なイングランド人でもなかったことは覚えておかなければなりません。彼が属していたのは帝国なのです。帝国においてこそ、人びとは輝かしい勝利を祝福したのでした。……彼らは、英雄を記念し、偉大なる創設者と帝国の守護者の記憶を永遠に保とうとしています。帝国の歴史上、そうした愛国心の尊重や公職への献身は何よりもいまの時代こそもとめられているのです。100年ほど前、グレイト・ブリテンの海外領土はなお不確実なものでした。グレイト・ブリテン諸島外部の広大な領土の支配権は、確固としたものでも、明確に定義されたものでもなかったのです。現在、世界の５分の１の領域と４億人もの人びとが帝国の旗のもとにあります。100年後のわたしたちの後継者が、このきわめて貴重な遺産を受け継ぎ、「万事がうまくいっている」という言葉とともにさらなる世代に手渡せたらとしたら、帝国にとっても世界にとってもそれは幸福なことでしょう[77]。

---

[73] 絵画や文学作品などにおけるウルフ将軍の記念や表象の問題をあつかった研究として、Alan McNairn, *Behold the hero: general Wolfe and the arts in the eighteenth century* (Montreal and Kingston, 1997)がある。また、Nicholas Rogers, 'Brave Wolfe: the making of a hero', in Kathleen Wilson (ed.), *A new imperial history: culture, identity and modernity in Britain and the Empire, 1660–1840* (Cambridge, 2004), pp.239–59もみよ。

[74] *PD*, xxvi, col.1199: Commons, 13 July 1813.

[75] 管見のかぎりでは、モニュメントが完成しセント･ポール大聖堂で公開されたとき、除幕式などの儀礼がおこなわれたとする記録をみいだすことはできない。また、戦勝記念日などに行事が催されることもほとんどなかった。

[76] 細川道久『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』（刀水書房、2007年）、第2章をみよ。

[77] *The Times,* 15 October 1912, p.5.

むすびにかえて

これまで本稿では、フランス革命・ナポレオン戦争時代にセント・ポール大聖堂に建立された軍人のモニュメント、とりわけ陸軍士官のモニュメントについて考察を進めてきた。そのさい、革命フランスとの対峙によるイギリスの自由の再定義、スコットランド人の功績の表象、帝国の変容という、イギリスのナショナル・アイデンティティの問題を考えるうえで重要となる論点に注目して、モニュメント建立の背景や経緯、意味をあきらかにした。最後に、その後のセント・ポール大聖堂の軍人のコメモレイションに簡単に述べ、本稿のむすびにかえることにしたい。

ナポレオン戦争の後半になると、議会で建立が決議される軍人のモニュメントの数は大きく増加した。計33体のモニュメントのうち、半数にあたる17体の建立が1812年から23年にかけて決議されたが、そのほとんどが陸軍士官を追悼するためのものだった。先述したように、戦死した士官の記念をもとめる遺族や戦友たちの要望もあって、感謝決議の対象となった戦いで命を落としたわけではなくても、モニュメントの建立が認められたのである。1813年７月と1815年６月の議会の審議のように、４体のモニュメント建立がまとめて決議されることさえあった。この傾向の帰結が、勝利や戦果などに関係なく、戦死した士官のモニュメント建立のために規則を定めることであった。ワーテルローの戦いの直後、外相カースルレイは議会で次のように提案したのである。

> ［モニュメント建立の］規則とは、これまでは議会の感謝決議の対象となった戦いで戦死した士官を追悼するために、モニュメントを建立するというものでした。この規則は２、３例を除いて外れたことはありません。しかし、わたしは次のことを希望します。位階を基準としたモニュメント建立のための規則を定めること。つまり、わが国の軍務において命を落とした、陸軍少将の位階をもつすべての士官にたいして［この名誉が］与えられるべきこと。士官が戦死した戦闘の規模を関わりなく、国王の閣僚によってその記念行為が実施されるよう定めること。これは、国にとって有益なことでしょうし、イギリスの士官たちの勇敢さにとって、刺激は、そうたしかに刺激は必要なことでしょう[78]。

ここで、少将以上の位階をもつ士官が対象とされていたのは、これまでの議会の慣習を明文化すると同時に、1815年１月におこなわれたバス勲章の再編と軌を一にしていた。このときバス勲章は、３つのランクに区分されると同時に定員が大幅に拡大され、最上位のナイト・グランド・クロスは、海軍陸軍問わず、少将以上の位階をもつ士官に授与されたのである[79]。

---

[78] *PD*, xxxi, cols.913–5: Commons, 21 June 1815.

[79] Sir Anthony Wagner, *Heralds of England: a history of the Office and College of Arms* (1967), p.447.

しかし、このような規則による軍人のモニュメント建立は、結局実現することはなかった。それどころか、1830年代以降の「改革の時代」においては、なぜセント・ポール大聖堂でナポレオン戦争の勝利や英雄が記念されるのか、その意味が問い直され大きく揺らいでいたのである。その時代、セント･ポール大聖堂への無料拝観をもとめる政治運動が活発に展開しただけではなく、大聖堂に建立された軍人のモニュメントを国民がよりアクセスしやすい場所に移動することも提案され、世論の支持を集めていた。1842年にナポレオン戦争時代の海軍の英雄、サー・シドニ・スミスとソーマレズ卿、エクスマス卿のモニュメント建立が満場一致で決議されたものの、こうした状況から、いずれもグリニッジ王立海軍病院に配置されたのである[80]。ナポレオン戦争の記憶とセント･ポール大聖堂の結びつきがあらためて想起され、国民に広く再認識される重要な契機となったのは、ワーテルローの戦いの勝者、ウェリントン公の国葬(1852年)であった。

[80]「改革の時代」におけるセント･ポール大聖堂の状況にかんしては、以下の拙稿を参照されたい。中村武司「「イギリスのパンテオン」の創出と偉人顕彰――19世紀前半のセント・ポール大聖堂とその公開性」、『待兼山論叢〈史学篇〉』39号(2006年)、31–55頁。